

2025 年度 駒沢女子大学

「学修到達度の確認」実施報告書

4 年終了時確認報告書

教育指針に関する検討委員会

2025 年度 4 年終了時「学修到達度の確認」の報告書

1. 実施人数／対象者数

対象者数	実施人数	回答率
19 名	19 名	100%

2. 集計結果

教育目標	学修指針	レベル 4		レベル 3		レベル 2		レベル 1		平均値
		回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	
D P 1	教養力	4	21.1%	11	57.9%	4	21.1%	0	0%	3.00
	人間性	6	31.6%	11	57.9%	2	10.5%	0	0%	3.21
D P 2	コミュニケーション力	6	31.6%	7	36.8%	6	31.6%	0	0%	3.00
	社会性	4	21.1%	10	52.6%	5	26.3%	0	0%	2.95
D P 3	専門力	5	26.3%	11	57.9%	3	15.8%	0	0%	3.11
	判断力	5	26.3%	8	42.1%	6	31.6%	0	0%	2.95
D P 4	技術力	2	10.5%	9	47.4%	8	42.1%	0	0%	2.79
	実践力	6	31.6%	10	52.6%	3	15.8%	0	0%	3.16

3. 検証結果

〔現状説明〕 10 行程度で集計結果についての分析を完結に説明してください。

4 年終了時の場合は、2 年終了時と比較した学習指針などを具体的に説明してください。

また、D P 達成に向け C P、A P の適切性についても記載ください。

〔参考〕：全体平均 3.02 高評価：人間性 (3.21) 実践力 (3.16) 専門力 (3.11) 低評価：技術力 (2.79)

2 年終了時に高評価を得たのは DP1「人間性」(2.8) DP1「教養力」(2.67) であったが、4 年終了時では DP1「人間性」(2.8→3.21) に加えて DP4「実践力」(2.5→3.16) DP3「専門力」(2.4→3.11) に高評価が増加した。これは 3 年次以降に履修する専門科目での学修成果を学生自身が実感している表れと言えよう。また、「人間性」への高評価は、4 年間を通じて日本文化を教養として学修することで豊かな人間性の養成に大きく繋がったと考えられる。一方、3 年次以降に履修する専門ゼミを中心に養成されるべきである「技術力」(2.2→2.79) が他の項目にくらべて低評価となっている。2 年終了時のデータと比較すればいずれも向上しているものの、当該項目の学習指針(日本文化に対する独自の分析)の到達点が学生にとって実感し得なかったようである。とは言え、8 項目いずれも 2 年終了時に比べて向上し、殊に上昇率で見ると DP1(+14%) ,DP2(+18%) に対し DP3(+32%) ,DP4(+35%) の伸びは顕著であり、本学修到達度の結果を見る限り、A P(基礎的な知識・日本語力とコミュニケーション力)と卒業年次に至るまでの C P(専門力、自ら考え発信する実践力)の設定は妥当と考える。

4. 長所・特色

有意な成果が見られる事項、先駆性・独自性のある事項がある場合、目標として意図した成果が何であったかを明らかにしたうえで、実際にあがった成果が確認できる根拠を示しながら記述してください。特にない場合は「なし」としてください。	
学修指針	長所・特色
専門力・実践力	2 年次と比べて平均値と上昇率が顕著なのが「専門力」（平均値 3.11 上昇率 +29%）と「実践力」（平均値 3.16、上昇率 +26%）である。レベル 3.4 と評価した学生の割合は、「専門力」「実践力」とともに 84.2%（2 年終了時も 2 項目ともに 55.6%）に達した。専門科目の履修だけでなく、専門ゼミにおける卒業研究（卒業論文・ゼミ論文）作成を自らすすんで取り組み、努力して成し遂げた達成感が「専門力」と「実践力」に対する学生の高評価につながったと考える。

5. 今後の課題（問題点）

教育目的を実現する上での課題、学修指針に関する問題がある場合、記述してください。特にない場合は「なし」としてください。なお、「学修到達度の確認」の実施及び運用方法についてのご意見は、「学修指針欄」に「実施及び運用方法について」と記載の上、記述してください。	
学修指針	課題・問題点
技術力	「技術力」は、レベル 2 と自己評価した学生の割合（42.1%）が最も高く（レベル 1 の評価は 0 人）、平均値（2.79）も 8 項目の中で最低である（2 年次も平均値 2.20 で 8 項目中最低）。ただ、平均値の上昇率は 2 年終了時に比べ +26% で、「実践力」と同率である（D P 1,2 の 4 項目の上昇率より高い）。「技術力」のレベル 4 には「日本文化の諸分野について、独自の分析方法を確立し、説得力のある結論を導き出すことができる」とある。卒業研究に取り組む学修過程でこうした力はおのずと修得していると思われるが、「教育目標」に掲げる「日本文化の創造的担い手となる技術力」が学生にとって実感が湧かなかった遠因のひとつと推測され、今後、「技術力」に関する学修の「目標」と「実際」の整合を図る必要がある。

6. 課題・問題点に対する改善策

「5. 今後の課題（問題点）」の事項の改善策がある場合は、その具体的な計画（既に実施している場合はその進捗状況も含めて）を記述してください。	
学修指針	改善策
技術力	既知の情報や知識をインプットするのではなく、独自の視点や分析をおこなう力とともに、説得力ある結論を導き出す力の向上を期し、本専攻ではすでに専門ゼミを横断した個人発表の機会を設け、より多くの学生と活発に議論できる学修環境の工夫を講じている。今後は、歴史や文学などの領域を問わず、現代的あるいは実践的な視座で日本文化を捉え、社会生活で汎用し得る「技術力」の具体的な学習到達点（目標）を学生により端的に示していく必要があると考える。

2025 年度 4 年終了時「学修到達度の確認」の報告書

1. 実施人数／対象者数

実施人数	対象者数	回答率
20 名	20 名	100%

2. 集計結果

教育目標	学修指針	レベル 4		レベル 3		レベル 2		レベル 1		平均値
		回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	
D P 1	教養力	2	10%	9	45%	8	40%	1	5%	2.6
	人間性	7	35%	11	55%	0	0%	2	10%	3.2
D P 2	コミュニケーション力	3	15%	14	70%	2	10%	1	5%	3.0
	社会性	4	20%	13	65%	3	15%	0	0%	3.1
D P 3	専門力	2	10%	11	55%	7	35%	0	0%	2.8
	判断力	6	30%	9	45%	4	20%	1	5%	3.0
D P 4	技術力	2	10%	11	55%	7	35%	0	0%	2.8
	実践力	2	10%	11	55%	6	30%	1	5%	2.7

3. 検証結果

〔現状説明〕 10 行程度で集計結果についての分析を完結に説明してください。 4 年終了時の場合は、2 年終了時と比較した学習指針などを具体的に説明してください。 また、D P 達成に向け C P、A P の適切性についても記載ください。
(1) 教養力：2 年終了時にはレベル 2 の層が厚く、レベル 3、レベル 4 が薄かったが、卒業時にはレベル 3 及びレベル 4 へと到達している学生が多く見られる。 (2) 人間：2 年終了時にはレベル 3 以下の層が厚く、レベル 4 が薄かったが、卒業時にはレベル 3 及びレベル 4 へと到達している学生が多く見られる。 (3) コミュニケーション力：2 年終了時にはレベル 3、2 の学生が多かったが、卒業時にはレベル 3 およびレベル 4 へとシフトしており、学修成果が見られる。 (4) 社会性：もともと 2 年終了時でもレベル 3 まで到達している学生が多かったが、卒業時にはレベル 3、レベル 4 の割合が増えている。 (5) 専門力：2 年終了時にはレベルは全体的に低めであったが、卒業時にはレベル 3、2 の割合が増加した。 (6) 判断力：2 年終了時にはレベル 3、2 が多かったが、卒業時にはレベル 4、3 の層が厚くなった。

- (7) 技術力：2年終了時にはレベル2が多かったが、卒業時にはレベル3の層が厚くなった。
- (8) 実践力：2年終了時にもレベル3の学生が多かったが、卒業時にはレベル3に加えて4の数も増え、全体的にレベルアップが見られる。

4. 長所・特色

有意な成果が見られる事項、先駆性・独自性のある事項がある場合、目標として意図した成果が何であったかを明らかにしたうえで、実際にあがった成果が確認できる根拠を示しながら記述してください。特にない場合は「なし」としてください。

学修指針	長所・特色
人間性	「多様な価値観をどれくらい受け入れられますか？」という問いに対して非常に高いレベルを示している。多様性が叫ばれる時代にあって、そのことを授業等で学ぶ機会もあり、適切に対応できる力が身についているものと思われる。
社会性	「社会の一員として主体的に活動する意欲と責任感をどれくらい持っていますか？」という問いに対して高いレベルを示している。社会における責任や使命感というものを意識できる社会性が身についたものと判断する。

5. 今後の課題（問題点）

教育目的を実現する上での課題、学修指針に関する問題がある場合、記述してください。特にない場合は「なし」としてください。なお、「学修到達度の確認」の実施及び運用方法についてのご意見は、「学修指針欄」に「実施及び運用方法について」と記載の上、記述してください。

学修指針	課題・問題点
教養力	「世界の言語(英語)・社会・文化等に関する基本的な知識はどれくらいありますか？」という問いに対するレベルが若干低いように思われる。

6. 課題・問題点に対する改善策

「5. 今後の課題（問題点）」の事項の改善策がある場合は、その具体的な計画（既に実施している場合はその進捗状況も含めて）を記述してください。

学修指針	改善策
専門力	英語コミュニケーション専攻を卒業したことで、社会的には英語の専門知識があり、英語力や資格も有していると思われる。そういう意味では、TOEICや英検を積極的に受験させたりすると同時に、学生に対して自ら目標を設定し、それを実現していくよう指導することが肝要と思われる。

2025 年度 4 年終了時「学修到達度の確認」の報告書

1. 実施人数／対象者数

対象者数	実施人数	回答率
75 名	42 名	56%

2. 集計結果

教育目標	学修指針	レベル 4		レベル 3		レベル 2		レベル 1		平均値
		回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	
D P 1	教養力	9	21%	21	50%	12	29%	0	0%	2.93
	人間性	14	33%	21	50%	7	17%	0	0%	3.17
D P 2	コミュニケーション力	9	21%	24	57%	9	21%	0	0%	3.00
	社会性	10	24%	22	52%	9	21%	1	2%	2.98
D P 3	専門力	10	24%	20	48%	11	26%	1	2%	2.93
	判断力	9	21%	21	50%	10	24%	2	5%	2.88
D P 4	技術力	8	19%	20	48%	14	33%	0	0%	2.86
	実践力	9	21%	20	48%	11	26%	2	5%	2.86

3. 検証結果

〔現状説明〕 10 行程度で集計結果についての分析を完結に説明してください。

4 年終了時の場合は、2 年終了時と比較した学習指針などを具体的に説明してください。

また、D P 達成に向け C P、A P の適切性についても記載ください。

回答率の低さには留意しつつ、学修指針に示される 8 つの能力のうち、全能力で「身についた」(lv.2) 以上を選択した者が 9 割を超えた。4 年生終了時の調査で、全項目で 9 割以上の学生が「身についた」以上の回答をしていることから、専攻の目指す学修目標は達成しているといえる。したがってこの D P 達成に C P、A P は適切に寄与したと考えられる。

より高水準での達成を検証するため、4「非常に身についた」(lv.4) と 3「かなり身についた」(lv.3) に絞れば、得点の高い順に「人間性」「コミュニケーション力」「社会性」(約 8 割)、「専門力」「教養力」「判断力」「技術力」「実践力」(約 7 割)であった。2 年終了時の「人間性」「社会性」(約 8 割)、「コミュニケーション力」「判断力」(約 7 割)、「実践力」(約 6 割)、「教養力」「専門力」(約 5 割)、「技術力」(約 4 割)の得点と比して、全体的な底上げと「技術力」「専門力」「教養力」の大幅な向上が特徴といえる。3 年次以降の専門科目の履修や専門ゼミへの所属が得点伸長に寄与したと考えられ、以上から C P と A P は適切に機能したと考えられる。

4. 長所・特色

有意な成果が見られる事項、先駆性・独自性のある事項がある場合、目標として意図した成果が何であったかを明らかにしたうえで、実際にあがった成果が確認できる根拠を示しながら記述してください。特にない場合は「なし」としてください。	
学修指針	長所・特色
人間性	学生が多様な価値観に触れ自らの立場を形成することを意図し、複数専門分野の教員による講義（例 現代社会総合講座）や対話的学修を提供している。自由記述から、授業や教員との関わりを通じて人間関係理解が深まり、日常場面で学修内容の活用による自己理解と価値観形成を進める様子が確認できる。上記は「自立した思考の必要性を理解し、自分自身の価値観を構築しようと努力する」という「人間性」の醸成に有効であったと評価できる。
コミュニケーション能力	ゼミ活動やグループワーク、発表、レポートなど、学生が自らの考えを整理し他者に伝える機会を提供してきた。自由記述から、上記の経験を通じての対話力や協働力の向上、意見交換や発表による積極性の高まりが確認できる。授業数減少による実感の乏しさも指摘されたが、教員の支援のもとゼミや就職活動で自信を得たとの記述もみられる。以上より、当該能力に関する学修指針が達成されたと評価できる。

5. 今後の課題（問題点）

教育目的を実現する上での課題、学修指針に関する問題がある場合、記述してください。特にない場合は「なし」としてください。なお、「学修到達度の確認」の実施及び運用方法についてのご意見は、「学修指針欄」に「実施及び運用方法について」と記載の上、記述してください。	
学修指針	課題・問題点
技術力・実践力	同指針は、知識の深化や日常生活への応用といった実践的な学びを求める。そのため3年次以降は授業数や大規模クラスでのグループワークが減少し、少人数ゼミを中心とした専門的・実践的学修へと質的転換が図られている。自由記述では、この変化を通じて実践力の向上を実感する学生がいる一方、授業数の少なさから学びの深まりを十分に感じられないとの声もあり、こうした転換の意図が学生に十分共有されていない可能性が示唆された。

6. 課題・問題点に対する改善策

「5. 今後の課題（問題点）」の事項の改善策がある場合は、その具体的な計画（既に実施している場合はその進捗状況も含めて）を記述してください。	
学修指針	改善策
技術力・実践力	5で述べたように、3年次以降の「量から質への転換」を学生が理解できるよう、授業の初期段階で学修構造の変化とその意図を明確に伝える必要がある。また、ゼミで扱う探究や応用課題の意義を示し、知識がどのように実践へつながるのかを例示する等の具体的支援を行う。その上で、授業数が少なくなることを意味を学生が理解できるよう説明することが重要である。

2025 年度 4 年終了時「学修到達度の確認」の報告書

1. 実施人数／対象者数

対象者数	実施人数	回答率
97 名	64 名	66.0%

2. 集計結果

教育目標	学修指針	レベル 4		レベル 3		レベル 2		レベル 1		平均値
		回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	
D P 1	教養力	22	34.4%	34	53.1%	6	9.4%	2	3.1%	3.2
	人間性	32	50.0%	26	40.6%	6	9.4%	0	0.0%	3.4
D P 2	コミュニケーション力	18	28.1%	28	43.8%	14	21.9%	4	6.3%	2.9
	社会性	19	29.7%	33	51.6%	10	15.6%	2	3.1%	3.1
D P 3	専門力	12	18.8%	32	50.0%	19	29.7%	1	1.6%	2.9
	判断力	15	23.4%	28	43.8%	18	28.1%	3	4.7%	2.9
D P 4	技術力	17	26.6%	39	60.9%	8	12.5%	0	0.0%	3.1
	実践力	12	18.8%	27	42.2%	24	37.5%	1	1.6%	2.8

3. 検証結果

〔現状説明〕 10 行程度で集計結果についての分析を完結に説明してください。

4 年終了時の場合は、2 年終了時と比較した学習指針などを具体的に説明してください。

また、D P 達成に向け C P、A P の適切性についても記載ください。

1. DP1 の人間性においてレベル 4 の割合が最も高い
2. ほとんどの項目でレベル 3 の割合が最も高い
3. 概ね 8 割の学生は、DP1・DP2・DP4 の一部（判断力）についてレベル 3 以上を報告している
4. 各学修指針についてレベル 1 と報告した者は 0~4 人と少ない
5. 2 年終了時と比べ、平均値はどの項目も 1 ポイント程度上昇している。したがって、2 年時から始まる心理学類の専門的学びについては、DP・CP・AP が適切に設定されていると言える
6. 回答割合は 2 年終了時と比べ、下落している（約 9 割→約 6 割）
7. 4 年間の学びの感想を書かせた自由記述には、視野の広がり、知見の活用、自己成長、コミュニケーション力や共感力の向上、論理性や技術性の発達、他者理解など、心理学類が掲げた学習指針が満遍なく反映されており、本学心理学類の教育の一貫性・妥当性が示唆された。

4. 長所・特色

有意な成果が見られる事項、先駆性・独自性のある事項がある場合、目標として意図した成果が何であったかを明らかにしたうえで、実際にあがった成果が確認できる根拠を示しながら記述してください。特にない場合は「なし」としてください。	
学修指針	長所・特色
教養力・人間性・コミュニケーション力・社会性・判断力	前年度と比較すると、8割以上の学生がレベル3以上を報告した項目として、新たにコミュニケーション力と判断力の2つが追加された。自由記述でも、特にコミュニケーション力の向上についての意見が多くみられた。例年同様、卒業論文・ゼミ論文での研究活動を通して学びが深まったという回答も多くみられたことを踏まえると、専門ゼミや卒業論文をはじめとした心理学類が提供する専門的な学びについて、その意義や効果を学生たちが実感していると言える。

5. 今後の課題（問題点）

教育目的を実現する上での課題、学修指針に関する問題がある場合、記述してください。特にない場合は「なし」としてください。なお、「学修到達度の確認」の実施及び運用方法についてのご意見は、「学修指針欄」に「実施及び運用方法について」と記載の上、記述してください。	
学修指針	課題・問題点
専門力・技術力・実践力	専門力・技術力・実践力については、決して達成度が低いわけではないものの、他の項目と比べてレベル3以上が相対的に少ない。これは、心理学類において少なくない学生（特に専門職志望学生）が公認心理師・臨床心理士といった専門職基準で自己評価を行い、自らの伸びを過小評価している可能性をうかがわせるものである。

6. 課題・問題点に対する改善策

「5. 今後の課題（問題点）」の事項の改善策がある場合は、その具体的な計画（既に実施している場合はその進捗状況も含めて）を記述してください。	
学修指針	改善策
専門力・技術力・実践力	実施時に（控えめな自己評価は謙虚さの表れともみなせるものの）あくまで学生自身の成長をみるための自己評価であるということをアナウンスする。また、回答率が2年次と比べて3割程度減る傾向が例年うかがえるため、周知徹底を図る。

2025 年度 4 年終了時「学修到達度の確認」の報告書

1. 実施人数／対象者数

対象者数	実施人数	回答率
33 名	33 名	100%

2. 集計結果

教育目標	学修指針	レベル 4		レベル 3		レベル 2		レベル 1		平均値
		回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	
D P 1	教養力	8	24.2%	22	66.7%	3	9.1%	0	0%	3.15
	人間性	14	42.4%	17	51.5%	2	6.1%	0	0%	3.36
D P 2	コミュニケーション力	14	42.4%	17	51.5%	2	6.1%	0	0%	3.36
	社会性	15	45.5%	16	48.5%	2	6.1%	0	0%	3.39
D P 3	専門力	10	30.3%	20	60.6%	3	9.1%	0	0%	3.21
	判断力	11	27.3%	19	57.6%	3	9.1%	0	0%	3.24
D P 4	技術力	4	27.3%	20	60.6%	4	12.1%	0	0%	2.55
	実践力	13	39.4%	18	54.5%	2	6.1%	0	0%	3.03

3. 検証結果

〔現状説明〕 10 行程度で集計結果についての分析を完結に説明してください。

4 年終了時の場合は、2 年終了時と比較した学習指針などを具体的に説明してください。

また、D P 達成に向け C P、A P の適切性についても記載ください。

(1)2 年修了時アンケートは 3 段階評価であったので単純比較は難しいが、4 年修了時においてはすべての項目において平均値の上昇が見られた。このことは、ゼミ活動をはじめとする 3, 4 年次の学修が充実していたことを表していると考ええる。

(2)特に、「DP3a 専門力」においては 2 年終了時にはその値の低さ (1.86) を指摘しており、検証において「専門科目履修により向上を図る」旨記載されているが、その結果が反映されたものとなっていると考ええる。

(3)DC4 の技術力は 2.55、実践力が 3.03 と低い評価となっている。インターンシップや旅行研修など、学外でプロの現場に接する機会が多いからこそ、学生たちがその基準値を高く据えているかのではないかと分析する。卒業後観光分野を中心に活躍していく学生たちは、卒業後の現場でこの DC4 の能力をより一層求められることがわかっており、その準備としての大学での学修がもっと必要だったと実感しているのではないかと考える。

(4)よって、D P 達成に向けた C P および A P に関しては、特に少数制のゼミ活動を通じて能力開発の機会を持てるよう、教員の工夫が求められると考える。

4. 長所・特色

有意な成果が見られる事項、先駆性・独自性のある事項がある場合、目標として意図した成果が何であったかを明らかにしたうえで、実際にあがった成果が確認できる根拠を示しながら記述してください。特にない場合は「なし」としてください。	
学修指針	長所・特色
社会性	国内・海外のインターンシップに参加させることによって、プロの現場から多くを体験的に学ぶという目標に対し、入学時や2年修了時には見られなかった積極性が自らの中に芽生えたという自由記述が多くみられたことは、成果として確認することができる。

5. 今後の課題（問題点）

教育目的を実現する上での課題、学修指針に関する問題がある場合、記述してください。特にない場合は「なし」としてください。なお、「学修到達度の確認」の実施及び運用方法についてのご意見は、「学修指針欄」に「実施及び運用方法について」と記載の上、記述してください。	
学修指針	課題・問題点
教養力	「観光・文化に関する広汎な知識を体系化し、高度な企画を立案・実践できる」という教養力が平均値 3.15 と低くなっている。本項目に対しては、1年時の教養ゼミや一般教養科目から一貫して、地道ながらも継続した観光や文化に関しての貪欲な好奇心を醸成していくことが求められると考える。ともすれば4年次のゼミ論作成時まで軽視しがちな観光・文化の知識に対して、その重要性を1年次から意識させていく必要性を強く感じる。

6. 課題・問題点に対する改善策

「5. 今後の課題（問題点）」の事項の改善策がある場合は、その具体的な計画（既に実施している場合はその進捗状況も含めて）を記述してください。	
学修指針	改善策
教養力	留学生も増加してくる中で、基本的知識を授業内でさらにきめ細かく丁寧に指導すること、またその定着を授業後レポートなどでしっかりとチェックすることの重要性と緊急性は学部・学類内で共有している。基礎ゼミ、1年時の観光文化入門、さらには3年次からの専門ゼミにおいてもしっかりと実施していく旨学類・学部内で方針を立てている。

2025 年度 4 年終了時「学修到達度の確認」の報告書

1. 実施人数／対象者数

対象者数	実施人数	回答率
78 名	63 名	80.8%

2. 集計結果

教育目標	学修指針	レベル 4		レベル 3		レベル 2		レベル 1		平均値
		回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	
D P 1	教養力	13	20.64%	37	58.73%	10	15.87%	3	4.76%	2.95
	人間性	16	25.40%	33	52.38%	11	17.46%	3	4.76%	2.98
D P 2	コミュニケーション力	12	19.05%	27	42.86%	20	31.75%	4	6.35%	2.75
	社会性	11	17.46%	35	55.56%	14	22.22%	3	4.76%	2.86
D P 3	専門力	7	11.11%	37	58.73%	14	22.22%	5	7.94%	2.73
	判断力	8	12.70%	33	52.38%	17	26.98%	5	7.94%	2.70
D P 4	技術力	13	20.64%	35	55.56%	13	20.64%	2	3.18%	2.94
	実践力	12	19.05%	28	44.44%	20	31.75%	3	4.76%	2.78

3. 検証結果

〔現状説明〕 10 行程度で集計結果についての分析を完結に説明してください。

4 年終了時の場合は、2 年終了時と比較した学習指針などを具体的に説明してください。

また、D P 達成に向け C P、A P の適切性についても記載ください。

人間性の平均（2.98）は当学年の 2 年次における平均でも 8 項目中最も高く、2 年次平均（2.70）と比較して 0.28 点向上した。教養力の平均（2.95）は 8 項目中 2 番目に高く、2 年次平均（2.49）からは 0.46 点向上し、上昇率は 2 番目に高い。最も上昇率が高いのは技術力の平均（2.94）で、2 年次平均（2.30）からは 0.64 点向上した。

社会性の平均（2.86）は 8 項目中 4 番目で、2 年次平均（2.62）と比較して 0.23 点向上したが、上昇率は 8 項目中最も低い。同様に平均点が 5 番目の実践力（2.78）は 2 年次平均（2.51）と比較して 0.27 点向上したものの、上昇率は 2 番目に低い。またコミュニケーション力の平均（2.75）は 8 項目中 6 番目でそれほど高くないが、2 年次平均（2.39）から 0.36 点向上し、上昇率は 3 番目に高い。同様に平均点がさらに低い専門力（2.73）と判断力（2.70）は、2 年次平均と比較してそれぞれ 0.30～0.35 点向上し、上昇率は 4・5 番目に高い。

2023 年度 2 年次と比較すると全ての項目で向上しており、また各項目の平均点に極端な偏差がないことから、C P、A P の内容は概ね適切と判断する。

4. 長所・特色

有意な成果が見られる事項、先駆性・独自性のある事項がある場合、目標として意図した成果が何であったかを明らかにしたうえで、実際にあがった成果が確認できる根拠を示しながら記述してください。特にない場合は「なし」としてください。	
学修指針	長所・特色
技術力	3年次の実習課題や4年次の卒業研究・スタジオ課題を通して、専門とする分野の企画・計画・プレゼンテーション等の実施が技術力の向上につながった。卒業研究における作業報告会の実施方法の変更などが良い成果につながったと思われる。

5. 今後の課題（問題点）

教育目的を実現する上での課題、学修指針に関する問題がある場合、記述してください。特にない場合は「なし」としてください。なお、「学修到達度の確認」の実施及び運用方法についてのご意見は、「学修指針欄」に「実施及び運用方法について」と記載の上、記述してください。	
学修指針	課題・問題点
判断力	2年次平均点では8項目中7番目、4年次平均点は8項目中最低点であった。昨年度の実施においても当学修指針が最低点であった。専門分野に関する事例について、論理的に批判できる力を一層身につけさせる必要がある。
実施及び運用方法について	対象者数に対して実施人数が例年に比較して少なかった。

6. 課題・問題点に対する改善策

「5. 今後の課題（問題点）」の事項の改善策がある場合は、その具体的な計画（既に実施している場合はその進捗状況も含めて）を記述してください。	
学修指針	改善策
判断力	専門分野に関する事例について、論理的に批判できる力を身につけるために、事例を論理的に批判するレポート等の課題の実施を検討する。また課題エスキスや講評会などにおける学生間の作品講評・批評といった機会を通して、学生の判断力を向上させるよう取り組む。
実施及び運用方法について	授業期間中のスタジオ（ゼミ）内で学修到達度確認の告知と回収ができるように、実施時期と方法を再検討する。

2025 年度 4 年終了時「学修到達度の確認」の報告書

1. 実施人数／対象者数

対象者数	実施人数	回答率
88 名	59 名	67.0%

2. 集計結果

教育目標	学修指針	レベル 4		レベル 3		レベル 2		レベル 1		平均値
		回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	
D P 1	教養力	4	6.8%	41	69.5%	14	23.7%	0	0.0%	2.8
	人間性	8	13.8%	42	72.4%	8	13.8%	0	0.0%	3.0
D P 2	コミュニケーション力	14	24.6%	33	57.6%	10	17.5%	0	0.0%	3.1
	社会性	10	17.2%	36	62.1%	12	20.7%	0	0.0%	3.0
D P 3	専門力	19	32.8%	33	56.9%	6	10.3%	0	0.0%	3.2
	判断力	7	11.9%	31	52.5%	21	35.6%	0	0.0%	2.8
D P 4	技術力	8	13.8%	39	67.2%	11	19.0%	0	0.0%	3.0
	実践力	8	13.6%	38	64.4%	13	22.0%	0	0.0%	2.9

3. 検証結果

〔現状説明〕 10 行程度で集計結果についての分析を完結に説明してください。

4 年終了時の場合は、2 年終了時と比較した学習指針などを具体的に説明してください。

また、D P 達成に向け C P、A P の適切性についても記載ください。

- (1) 学修指針における各項目の学習到達度の平均値は 2.8 点以上で、2 年終了時と比べて全ての項目が増加した。
- (2) 2 年終了時では、学習到達度の平均値が特に高かった DP1 の「人間性」（2.8 点）、DP2 の「コミュニケーション力」（2.9 点）と「社会性」（2.8 点）は、4 年終了時にさらなる増加がみられた。
- (3) 4 年終了時における DP1 の「教養力」、DP3 の「専門力」「判断力」、DP4 の「技術力」「実践力」の平均値は、2 年終了時と比べて大きく増加した。
- これらの結果から、本学科の教育内容は、「教養力」「人間性」「コミュニケーション力」「社会性」を包括的に高め、栄養士・管理栄養士として社会的責務を果たしながら、幅広い教養とコミュニケーション力を養い、社会で活躍できる力を身に付けられることが確認できた。さらに、3 年次以降のカリキュラムでは、「専門力」「判断力」「技術力」「実践力」も十分に高められたことが確認できた。4 年終了時にて、すべての学修到達度の平均値が 2.8 点以上と高かったことは、D P 達成に向けて C P、A P が適切であったと考えられた。

4. 長所・特色

有意な成果が見られる事項、先駆性・独自性のある事項がある場合、目標として意図した成果が何であったかを明らかにしたうえで、実際にあがった成果が確認できる根拠を示しながら記述してください。特にない場合は「なし」としてください。	
学修指針	長所・特色
専門力	専門力を養うために、様々な授業や授業外活動を学生に提供していることや専門科目間の連携を図り、体系的な知識の習得に注力していることが、専門力の向上につながったと考えられた。
コミュニケーション力	栄養士・管理栄養士として良好な対人関係を築けるように、心理学や臨床心理学を必修科目としている。対象者の心理状態にも配慮し、心身両面から健康を支えることができる人材の育成を目指していることが、「コミュニケーション力」の向上に役立ったと推察された。

5. 今後の課題（問題点）

教育目的を実現する上での課題、学修指針に関する問題がある場合、記述してください。特にない場合は「なし」としてください。なお、「学修到達度の確認」の実施及び運用方法についてのご意見は、「学修指針欄」に「実施及び運用方法について」と記載の上、記述してください。	
学修指針	課題・問題点
実施方法について	学修到達度の確認の実施は、12月18日の授業にて教員が告知し、Google クラスルームとメールでも周知を行なった。Google クラスルームに Google フォームを掲出して回答を得たが、回答率は67.0%であった（回答締め切り1月20日）。卒業後も管理栄養士として専門性を維持・向上していくためには学びの継続性が求められよう。そこで、学生自身が学修到達度を確認する重要性は高いと考えられ、回答率をより高めていく必要性があげられた。

6. 課題・問題点に対する改善策

「5. 今後の課題（問題点）」の事項の改善策がある場合は、その具体的な計画（既に実施している場合はその進捗状況も含めて）を記述してください。	
学修指針	改善策
実施方法について	学修到達度の確認の実施を Google フォームを用いて行なったが、回答率は67.0%であった。今後は、より回答率を高めていくために、学生が回答を行ないやすい機会の設定や周知の工夫などが求められた。

2025 年度 4 年終了時「学修到達度の確認」の報告書

1. 実施人数／対象者数

対象者数	実施人数	回答率
72 名	72 名	100%

2. 集計結果

教育目標	学修指針	レベル 4		レベル 3		レベル 2		レベル 1		平均値
		回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	
D P 1	教養力	19	26.4%	42	58.3%	8	11.1%	3	4.2%	3.07
	人間性	46	63.9%	24	33.3%	2	2.8%	0	0%	3.61
D P 2	コミュニケーション力	42	58.3%	27	37.5%	2	2.8%	1	1.4%	3.53
	社会性	34	47.2%	36	50	1	1.4%	1	1.4%	3.43
D P 3	専門力	23	31.9%	40	55.6%	7	9.7%	2	2.8%	3.17
	判断力	25	34.7%	37	51.4%	8	11.1%	2	2.8%	3.18
D P 4	技術力	24	33.3%	40	55.6%	7	9.7%	1	1.4%	3.21
	実践力	26	36.1%	37	51.4%	7	9.7%	2	2.8%	3.21

3. 検証結果

〔現状説明〕 10 行程度で集計結果についての分析を完結に説明してください。 4 年終了時の場合は、2 年終了時と比較した学習指針などを具体的に説明してください。 また、D P 達成に向け C P、A P の適切性についても記載ください。
本年度卒業生は看護学科 2022 年度カリキュラム履修の最初の学年であり、2024 年度卒業生と比較すると、すべての項目で平均値が上昇し、レベル 4 と評価している割合 10%以上高くなっていた。特に「人間力」「コミュニケーション力」のレベル 4 の割合が 63.9%、58.3%は特筆すべき結果であった。また、2 年終了時と比較すると、教養力 2.66→3.07、人間性 3.00→3.61、コミュニケーション力 3.01→3.54、社会性 2.89→3.43、専門性 2.63→3.17、判断力 2.53→3.18、技術力 2.60→3.21、実践力 2.56→3.21 ですべての項目で 0.4～0.6 ポイント上回った。2024 年度卒業生の 2 年終了時から 4 年終了時の 0.68～1.05 ポイントに比べると抑えられているが、2 年終了時点の評価点が当学年の方が上回っていることから、低学年からの学修効果が高かったのではないかと考えられる。その要因としては、科目履修の前提条件に加え、2022 年度カリキュラムで「2 年次までの必修科目をすべて修得済みであることが 3 年次以降の履修の進級要件」としたことが影響していることが考えられる。GPA や単位修得状況を、アドバイザーが把握し適切に面談などを行うことも DP 達成に寄与していると考えられる。

4. 長所・特色

有意な成果が見られる事項、先駆性・独自性のある事項がある場合、目標として意図した成果が何であったかを明らかにしたうえで、実際にあがった成果が確認できる根拠を示しながら記述してください。特にない場合は「なし」としてください。	
学修指針	長所・特色
人間性	数多くの実習で実際に人々と関わることで、臨床家や当事者のゲストスピーカーによる講義を多彩に取り入れ、多様な事例に触れ、考える機会が人間性を培うために有効であると考えます。
コミュニケーション力	2022年度カリキュラムより導入した「ふれあい実習」で低学年のうちから幅広い世代、様々な地域の生活の場での人々と関わったこと。授業ではグループワークを多く取り入れていること、臨地実習では多様な人々との深く関係を持つことで、コミュニケーション力がさらに向上していると考えます。

5. 今後の課題（問題点）

教育目的を実現する上での課題、学修指針に関する問題がある場合、記述してください。特にない場合は「なし」としてください。なお、「学修到達度の確認」の実施及び運用方法についてのご意見は、「学修指針欄」に「実施及び運用方法について」と記載の上、記述してください。	
学修指針	課題・問題点
専門力 判断力	専門基礎科目、基礎看護から専門領域に至るまで知識を統合し、対象者の全体像を理解するための応用力、看護の視点の育成が必要である。各科目の学びの関連性が意識できるような指導のために教員間の連携が必要である。
技術力 実践力	実践力の育成には、臨床との教育目標、実習内容の共有と共に学生が実施可能な看護技術と指導方法を具体的に打ち合わせた上で、実践できる機会を確保していく必要がある。さらに、臨地実習における学生の看護技術を実践する意欲と、そのための学生自身の準備が重要である。

6. 課題・問題点に対する改善策

「5. 今後の課題（問題点）」の事項の改善策がある場合は、その具体的な計画（既に実施している場合はその進捗状況も含めて）を記述してください。	
学修指針	改善策
専門力 判断力	看護師として求められる専門力、判断力の育成には、臨床での多重課題への対応、曖昧・不確実な状況、倫理的ジレンマなど高度な課題について看護教員、臨床指導者のサポートが必要である。指導は個々の教員、臨床指導者に任されており、指導戦略の確立が必要である。
技術力 実践力	看護技術は手順のみではなくその根拠、個別性への対応が重要であるが、手技が未熟な段階では、手順のみに集中しがちとなる。臨床実習での実践力を高めるためにも学内での技術演習の習熟度を上げることが必要である。学内で主体的に練習できるような環境づくりや機会の提供も必要である。

2025 年度 駒沢女子大学

「学修到達度の確認」実施報告書

4 年終了時確認報告書

2026 年 3 月 4 日

教育指針に関する検討委員会